

親鸞仏教センター通信

2002.
September

2002年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail tomo-k35@k6.dion.ne.jp

第3号

揺るがす言葉

親鸞仏教センター研究員 田村 晃 徳

『アンジャリ』第3号に徳永進氏が「『臨床』という言葉が好きだ」と書いておられた。その表現に倣えば、私の場合は「実存という言葉が好きだ」となる。現在、実存が日常語として用いられることはあまりないかもしれない。しかし、それは実存という言葉が生命力を喪失したのではない。私自身がそうであったように、実存とは現代においてもなお人を惹きつける言葉なのだ。それはその言葉に内在する力に由来するのであろう。人を惹きつけ、人の内面に何かを喚起する、これは言葉として大切なことだ。生きている言葉は人を生かすのである。

実存という言葉は、文字からは何を意味しているのか分かりづらい。しかし、それを「現実存在」の略称だと解説することは無意味であるどころか、かえって言葉の躍動性を断ち切るだろう。文字の意味は分からなくとも、実存という言葉に触れた者は何かを感じることができる。それは、その言葉が人間に実動しているとも言えるし、人間がその言葉を本能的に求めていたとも表現できる。つまり、無意識にせよ、自身の在り様に不安を抱くからこそ、人は実存に惹かれるのである。実存という言葉は私たちに前を示すものではない、かえって足下を凝視させる。日々時代の波に流れていく私たちに、その流れをとめて、今一度自身を考えさせる堰のような言葉である。実存に限らず、宗教的な言葉とはそのようなものの他にあるだろうか。

街を歩き、誰もが気づくことは日本語関連の書があふれていることだ。これは、言葉があまりにも乱れてしまい、本来の日本語に対する望郷にも似たような思いが今の流行を形成しているのだろう。言葉は空費されるものとなった。これは現代人の状況と無関係ではない。言葉と生は連関する。現代人は虚しさを抱えている、とよく言われるが、それは用いる言葉に表れているだろう。時代を問わず、空虚な生を送る者から発せられる言葉がまた空虚であるように、真実の言葉は、人間に真実の生を惹起しようとするのだ。

実存とは人間を揺るがす言葉だ。ひるがえって、現代にはそのような言葉がいかに希少となってしまったことか。センターはこのような時代に生まれた。私たちが果たすべき課題は明確であらう。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 闇を担って生きる

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、先にセンター通信でお伝えした第5回までに引き続き、第6回と第7回が東京国際フォーラム(有楽町)で有識者の方々を招いて行われた。第6回では大慈悲をめぐって、第7回では本願をめぐって、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者の方々と活発に意見交換がなされた。ここでは、先に行われた第5回の問題提起からその一部を紹介する。

(越部良一)

■ 闇へ闇へ

曾我量深先生は若い頃、清沢満之先生の願いを受けて東京の真宗大学の教員を務めていたのですが、真宗大学が教国の保守勢力によってつぶされてしまい、越後の養子先のお寺に帰って、短い期間だけれど住職をされたそうです。門徒の家にお経をあげにまわったりといった生活の中で、「田舎寺の住職」という文章を書いています。

曾我先生はまだ若かったということもある



し、清沢先生の願いに触れたということもあり、それと何よりも、思想的能力の持ち主でありましたから思索が湧いてきてしまうのです。とにかく湧いてくる想念を自分で表現せずにはおれない。ところが、ご承知の方も多いように、曾我先生の若い頃の思索を了解できたのは金子大栄先生だけだというほど、曾我先生の思索というのは、普通では何を言っているのか分からないのです。そのくらい高度な思索をする素質を持っておられただけに、田舎に帰って、曾我先生と話し相手になるようなひとがいなかったのでしょうか。それで非常につらい時をすごされた。孤独感と自分の考えが表現できない辛さで悶々として……。そのことを曾我先生は何回も何回も手紙で金子先生に書き送っている。

「闇へ闇へ」と曾我先生はおっしゃっていますね。自分は寺に育ち、清沢先生の教えを受け、浄土真宗の救いが自分の救いだと思っていて生きてきた。ところが本堂で阿弥陀如来を拝んでも、阿弥陀如来の光が来なくなった。自分の精神生活が闇だと。いくら念仏を称えても、称えている自分のところが闇だというその事実をじっと見つめて、闇のようなつらさの中で救われなかった。

そして苦しんでいる中で、闇の中で、もがきながら如来の救いということを考えている中に、法蔵菩薩を思い出したのです。一切衆生を救わずんば止まずという、その願いが響いてきた。この闇こそ、法蔵菩薩がたすけようとする闇なのだと。阿弥陀如来の救いは自分に来なくなったけれども、法蔵菩薩がここにおられる。

法蔵菩薩というのは因位の菩薩です。「法蔵菩薩因位時」と『正信偈』にありますよね。つまり、これは因位の救いです。果の救いは光として来るけれど、因位の闇の中に、本当の闇の中にいっしょに歩もうと、苦悩を担^にって歩もうという大悲が来た。このことが実は光だったのだと。つまり外から来る光ではない。闇の中にこそ、本当に闇を生きようという光がある。法蔵願心は、明るみへではない。「闇へ闇へ」という、その闇へという願いにわれわれはたすかるのだ。闇を担って一切衆生をたすけようという願い。それを聞いたら、自分が闇に苦しむなどということはたいしたことではない。法蔵菩薩が立ち上がって来る。闇を担って生きるのだ。そういう直感を得られて立ち直られた。曾我先生の一生の仕事のうちで一番面白いのが、この法蔵菩薩ですね。

■ 因に立ち続けるということ

親鸞聖人は、信心は浄土の正因だとおっしゃる。信心というのは因です。しかしどこかで人間は果が欲しい。つまり結果を持ちたい。仏教でいえば涅槃が欲しい、菩提が欲しい、自分はさとりを得たのだと言いたい。ところが親鸞聖人は、どこまでも自分を愚かな、苦悩する人間として、罪深い人間として生き切った。本当に愚かで罪深い身であるという自覚と一つに、自分の中に如来の大悲をいただいたという確信をもち、それを「信心」という名で押さえるわけです。こういう考え方、つまり因のままに立ち続けるという発想は、われわれの普通の考え方にはないのではないかと思います。だからわれわれには考え難い。因を得たら果を得たいというのが、日常経験の延長上にあるわれわれの要求ですから。たねをまくのは何のためかといったら、芽が出て花が咲いて実がなって、それが取れるというのがわれわれの欲^ほびですから。たねだけでいいというのはありませんね。あなた方勉強しなさい、そうしたら立派な人間になれ



ますよと。つまり果を約束して、果になると。結局、もっとまじな人間、より人間らしい人間というような発想の超越の方向です。

果の救いが欲しい、明るみが欲しい、光が欲しいと言う。けれども本当は、そういうものでは苦悩のいのちはたすからない。光でたすかるとか、そういうのではないわけではないけれど、それは醒^さめてしまう。酔いが醒めるように醒めてしまう。むしろ苦悩の実存、逃げることのできない罪惡のいのち、そこで、それをそのまま引き受けて歩むような大悲心というものに触れれば、それが救いなのだ。どうにも救い難い人間であってこそ、本当に救われる道がそこにあるのだということが証示できる。

現代というこの時代は、本当にどのこと一つをとっても解決の道がない。とにかく何であれ手立てがなくなりつつあるわけでしょう。そういう時に、どうにかしたらどうにかなるというふうに考えるのが、近代理性だろうと思うのです。しかし、どうにかできるという発想で何とかしていくということは、もう行き詰まっているのではないかと思うのです。本当はどうにもならないのだと。どうにもならないということに立ってどうするのだという発想ができるとすれば、親鸞しかないのではないか。これは私の思いなのですが、あきらめるわけではなく、あきらめるというよりも、どうにもならないというところまで見抜いた上で、発想を転換して立ち上がらなければいけないのではないかということ、いろいろな問題について思うわけなのです。

(文責：センター)

みちをも存知し、また法文等をも
しりたるらんと、ここにいくお
ぼしめしておわしましてはんべら
んは、おおきなるあやまりなり。
もししからば、南都北嶺にも、
ゆゆしき学生たちのおおく座せら
れてそうろうなれば、かのひとに
もあいたてまつりて、往生の要よ
くよくきかるべきなり。

③ 親鸞におきては、ただ念仏して、
弥陀にたすけられまいらすべし
と、よきひとのおおせをかぶりて、
信ずるほかに別の子細なきなり。

念仏は、まことに浄土にうまる
るたねにてやはんべるらん、また、
地獄におつべき業にてやはんべる
らん。総じてもって存知せざるな
り。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

方々にでもお会いになって、真実への目覚めがどの
ように実現されるかをよくよくお尋ねになるがよ
い。

この私「親鸞」においては、ただ念仏によって実
在を回復できるという如来の本願の道を法然上人か
らいただいて、それを信ずるのみである。

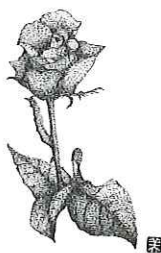
念仏は、本当に浄土という世界へいくための原因
なのか、また地獄という世界へ落ちる行為なのか、
私は一切知らない。

語 註

① 【極楽】阿弥陀如来の浄土を神話的・感性的に表
現した言葉。地獄・極楽は対概念であり、苦・楽
という対応で表されるが、ここでは苦楽を超えた
真実の世界を表している。

② 【南都北嶺】奈良と比叡山のこと。奈良・比叡山
にあった、当時の仏教を代表する寺院。その仏教
界の意向で法然の教団が弾圧された。

③ 【親鸞】本願の信念を頂いている事実を、強く表
明する場合の自己自身の名のり。



私の「冊」

(櫻井智浩)

『近代に対する仏教的批判』

—平野修師の仕事とその意義—

今村仁司著

著者は「現代語訳 清沢満之語録」(岩波
現代文庫)の編訳者。内容は「平野修先生
七回忌法要」記念講演に基づき書き下ろし。
われわれが仏教徒であること、われわれ
が現代に生きていること。本来、不可分の
二つの課題が、応答することなく別々に問
われてきた。その「問いかけ」自体が、そ
れぞれの立場への居直りとなり、その無明
性を自他共に納得させるような「驚き」を
見失ってしまったのではないか。

現代の問題性を明らかにすること。それ
は、真の意味でわれわれが仏教徒たり得て
いるのか、という問いに直結している。そ
のことをこの本はあらためて訴える。

【申し込み先】

「平野修先生七回忌法要」実行委員会

TEL 0620-10337

金沢市金石西4-19-41 幸圓寺内

TEL (076) 267-11010



『聖典』の試訳（現代語化）

中世の言葉を現代の言葉へ訳すことを私たちは「現代語化」と名づけている。当然のことだが、中世の人間と二十一世紀の現代人は、生物学的には同じであつても異なつた意味世界を生きている。現代人は、いわゆる「この世」に関心の比重を置いているが、中世の人々は「あの世」に比重を置いて生きていた。いわゆる「あの世」に永遠に安楽な世界を想定し、「この世」を「仮の世」として生きていた。『歎異抄』も、そのような意味世界を土台にしつつ「あの世」と「この世」とを共に超越する言葉が紡ぎ出されている。現代語化することは直訳ではなく、まさしく「創造的な翻訳」でなければならない。（第二条は長文のため、二回に分けて掲載する）

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第二条〉

原文

おのおの十余か国じゅうよこくのさかいをこえて、身命しんみょうをかえりみずして、たずねきたらしめたまう御おんころざし、ひとえに往生極楽①のみちをといきかんがためなり。

しかるに念仏よりほかに往生の

現代語訳

あなたがた一人一人が、はるばる長い道のりを、大切な身体からだと生命いのちを危険にさらしてまで、たずね求めてこられた志こころざしは、真実の生活が実現する道理を体得したいということにある。

しかし、念仏以外に真実の生活が実現する道理を知っていると、經典等を知っているのだらうとお考えならば、根本的な間違いである。

もしそういうことなら、奈良や比叡山にはすぐれた学僧たちがたくさんおられるのだから、そういう

親鸞仏教センターの動き

（2002・6～8）

■2002年

- 6・1 情報誌「Taiin」第3号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第2号を発行。研究誌「現代と親鸞」を創刊。
- 6・7 第25回研究会議（研究・交流・広報出版等の具体化に向けた協議と実働企画）以降、12回の研究会議を開催。
- 6・14 親鸞聖人ご命日のつどい
- 6・21 第7回「親鸞思想の解明」連続講座（於・東京国際フォーラム）
- 6・20 第2次三浦崇内局発足
- 6・28 第8回「『聖典』の試訳（現代語化）」歎異抄研究会（於・センター）以降、4回の研究会議を開催。
- 6・28 櫻井智浩研究員に真宗大谷派擬議が授与される。論題「入喜提行論」の研究―「空性の修習の勸奨」を中心として―
- 7・1 人事発令（日野隆文主事が宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌準備本部主事に。新たに藤井朋行主事、中津功昭託が発令）
- 7・5 第1回「清沢満之研究会」（於・センター）
- 7・9 現代と親鸞の研究会⑩「若者の不安」
- 7・12 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7・26 第1回「英訳『教行信証』研究会（於・センター）」
- 8・1 人事発令（武田定光嘱託研究員、本多雅人嘱託研究員、越部良一嘱託研究員が再任。新たに、新田智通嘱託研究員、藤井淳昭託研究員、和田恵利子書記が発令）
- 8・5 第2回「清沢満之研究会」並びに第8回「親鸞思想の解明」連続講座（於・東京国際フォーラム）
- 8・20 第2回「英訳『教行信証』研究会」
- 9・1 「親鸞仏教センター通信」第3号を発行。

現代と親鸞の研究会・第3回

現代における
『歎異抄』の学びの視座

作家 高 史 明



高 史 明 氏

「現代と親鸞の研究会」の第3回目は、2月28日、アルカディア市ヶ谷(千代田区)において、作家の高史明氏を迎え、開催した。

センターでは、現代の言葉で親鸞聖人の思想を発信していくためのひとつの試みとして、『歎異抄』研究会を開いている。その学びの方向性を確認していく上で、今回は、高氏に現代における『歎異抄』の学びの視座について語っていただくとともに、センターへの期待とその役割について問題提起をいただいた。ここにその一部を紹介する。(本多雅人)

■「わかる知恵」の行き着く果て

昨年の9月11日に起きた、アメリカの世界貿易センタービルの同時多発テロにおけるブッシュ大統領の発言は、まさに人間中心の理性、いわゆる「わかる知恵」の代表的表現だったと思います。「文明と野蛮」という言葉、「善と悪の戦い」という言葉。そういう言葉が、そのまま現代を象徴しているわけです。私は、現代のすべてがわかるとする、そのような合理的理性というものが『歎異抄』と真っ向から衝突していると思います。

そこで、「わかる知恵」ということを足もとから考えてみますと、あそこで亡くなった人たちがどう受け止められているのかということが、現代の要^{かなめ}の問題だだと思います。「わかる知

恵」のレベルでこの死を見たときには、死はモノになった、無になったという理解の仕方が現代だと思うからです。そこに、現代の大きな盲点が表れているのではないかと思います。

人類が誕生し、そして進化していく過程の中で、死を意識し弔うことが行われるようになったと言われています。その死者と生者の出あいのところに文明が始まったということですが、私もそれに賛成です。そのようにして人間は生死を考えてきたと思うのですが、現代は、生というものが完全に死を排除したところに成り立つかのような日常生活を作っています。

そうしますと当然、生というもののわからなくなってきました。そして現代人は、それをどこでどう乗り越えていけるのかわからないでいるのです。生死をかけて、もう一度根っこにおいて生とは何か、死とは何かということを考えないと単なる知識に流れていってしまいます。ここに、現代の私たちの理性を中心にした時代が行き着いた姿があるのではないかと思います。

現代は、根こそぎ自分たちの依って立っている場所を見直さなければならない時代だと思います。

■念仏は如来の実践

しかし、近代が抱える問題の打開口こそ仏教に求めなければならないというほど短絡的な問題ではありません。実は、仏教でも学問・知識に陥っていくという問題があります。そういう問題を経て、親鸞聖人のすごい教えが誕生したと思うのです。

親鸞聖人の主著である『教行信証』^{きやうぎやうしんしやう}「化身^{けしん}土卷^{どまき}」に『大乘起信論』^{だいじやうきしんろん}が引用されています。これは非常に『歎異抄』の言葉にも相応しています。そこには、仏教の真理をもって人々を迷わすとあります。これは恐るべき言葉だと思えます。これを読んでいきますと、新宗教の、例えばオウム^{オウム}の若者たちのように、あれだけ勉強していながら空中遊泳という修行を励んでいく姿を見ているような気がします。つまり、仏教の究極の言葉をとおして、人々を迷いに誘い込んでしまうのです。そういう意味で、「善根力なければ」と言われていることの大事さを思えます。

親鸞聖人は『教行信証』^{しんのまき}「信卷」で、「それ^{おもん}みれば、信楽^{しんぎやう}を獲得^{ぎやくとく}することは、如来選^{ぜん}択^{じやく}の願心より発起^{はつぎ}す」と、善根力と同じ内容である「如来選^{ぜん}択^{じやく}の願心」ということを踏まえたうえで、「しかるに末代の道俗^{みづせ}・近世^{こんせ}の宗師^{しゆし}、自性^{じしやう}唯心^{ゆいしん}に沈^{しず}みて浄土^{じやうど}の真証^{まんと}を貶^{へん}す、定散^{じやうさん}の自心^{じしん}に迷^{まど}いて金剛^{こんかう}の真信^{まんと}に昏^{くら}し」と言われています。

自性唯心という華嚴の真理も、念仏がなければ学問になってしまうのです。このことから、科学だけの問題ではなくて、仏教の方にも、人間の歴史を作っていくときに同じ迷いを身にまといつていってしまうと思います。そのことを見抜いて、そうでないところを開かれたのが浄土真宗のすごさといえますか、念仏なしに世界はおそらく成り立たないだろうと思われる根拠が、ここにあるのです。

このことに気づかされてみますと、今日、いつの間にか真宗が「ただ念仏のみぞまこと」(『歎異抄』)という一点をどこかで踏み外して、学問になってしまったように思います。さらに言いますと、お念仏を称えるというのは、称えさせられるわけですから、一人ひとりが自らの体をとおして仏^{ほとけ}と出遇^{であ}っていくという実践だと思うのです。お念仏は解釈しているのではなくて、仏に実践させられているのです。実践なく

して仏さまの教えは頂戴できないと思います。そこが、現代に仏教が本当の意味で蘇^{よみがえ}ってくる要として考えられなければならないと思います。

生死の問題にたちもどってみますと、近代は人間中心のように見えながら、実は一番土台のところで見えないものを抱えています。いのちの道とは、他の世界と完全につながっています。『歎異抄』の言葉で言えば、「一切^{いつさい}の有情^{うじやう}は、みなもって世々^{せせ}生々^{しやうじやう}の父母兄弟^{ふも}なり」です。この言葉は概念ではないのです。そのまゝに「親鸞^{しんらん}は父母^{ふも}の孝養^{きやうよう}のためとて、一返^{いつべん}にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」とあって、一切の有情は、いのちとして皆つながっているということを私たちが納得できるようになるのは、お念仏なしには成り立たないのです。ここが現代の盲点です。念仏がないのです。そこでは死を見失うのです。

そういう意味で、死を理解しようということではなくて、死に出あったときにその悲しみや悩みをもっと深く突きつめていくということが大事なのではないかと痛感いたします。

(文責：センター)

高 史 明 (コ サミヨン) 作家

1932年、山口県生まれ。75年、息子・岡真史君が12歳で自死したことを契機に、深く『歎異抄』と親鸞聖人の教えに皈依する。75年、日本児童文学者協会賞、93年、仏教伝道文化賞を受賞。2001年にはNHK人間講座で「現代によみがえる歎異抄」を担当。著書に『少年の闇—歎異抄との出会い』ほか多数。



「現代と親鸞の研究会」(千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で)

■ 親鸞仏教センター開所式並びに交流懇談会を開催（4月26日）

親鸞仏教センターの完成を記念して、去る4月26日、同センターと学士会館（千代田区神田錦町）で開所式並びに交流懇談会が行われました。

開所式では、三浦崇宗務総長＝写真からセンター設立の願いを「親鸞聖人の人間解放の視点を現代の言葉で表現し、時代の闇の底で共苦することによって閉塞を打ち破ることがセンターの課題と責務」と述べられ、本多所長は「現代人の苦悩に正面からぶつかってこなかった伝統教団や寺院の責任は大きい。親鸞聖人の教え、仏教の智慧を、現代にどう生かすかという発想が必要。今、人類は末法濁世をますます深めているが、聖人の願いを灯火として掲げていきたい」と抱負を語られました。また、設計の集工舎、施行の太陽建設には感謝状が宗務総長より贈呈されました。

交流懇談会（学士会館）では、大学教授、医学、法曹、ジャーナリスト等、各界の識者をはじめ、当派の学事機関関係者、宗会議長など約90名の方々のご臨席のもと、「いま深く真実のいのちを見つめる」と題して作家の高史明氏＝写真から記念講演をいただきました。高氏は、「近代文明開化の中で、人々は仏教を完全に手放し、いき場所を失ってしまったのではないか。文明が野蛮かでものごとを計るならば、本当の意味で他者を尊重することはできない。そのような道筋こそが、近代が生んだ人間中心の理性である。理性が果たした役割は評価できるが、その上で、仏の智慧があることを訴えていくことが世界に対する最大の問題である」と言及されました。

引き続いての交流懇談の席では、宗務総長挨拶の後、ご来賓を代表して前田専學氏（日本印度学仏教学会理事長）から祝辞、佐々木教悟氏（大谷大学名誉教授、真宗大谷派董理院長）の祝杯＝写真の後、各界の識者相互の交流会が持たれました。途中、昨年7月に立ち上げた仮事務所（千代田区神田）やセンターの工事風景、また、開所式の様子などを約20点のスライドで紹介。その後、ご臨席者を代表して高城俊郎氏（小池・高城総合法律事務所所長）、竹内整一氏（東京大学大学院教授）、菅原伸郎氏（朝日新聞社記者）、関根瑛應氏（日本仏教徒懇話会代表世話人）、小川一乗氏（大谷大学長）から、今後のセンター活動への激励の言葉を頂き、最後に、当派の里雄康意参務から謝辞が述べられました。



● センター新スタッフの紹介

嘱託研究員 新田 智通

1971年生まれ。東京大学文学部思想文化学科卒業。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（仏教学）。

嘱託研究員 藤井 淳

1976年生まれ。東京大学文学部思想文化学科卒業。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（仏教学）。

主 事 藤井 朋行

書記 和田 恵利子

非常勤嘱託 中津 功

あ と が き

センター発足の動きをジャーナリストはどのように見られたか、各新聞見出しを中心に紹介したい▼「宗祖親鸞聖人の教え—現代の言葉で探究、表現—真宗大谷派、東京に研究機関設立へ」（毎日）、「政治・経済・文化など現代の課題が渦巻くメガロポリスで、時代の風を感じながら親鸞聖人の思想・信念を今日の言葉で吟味し、社会に発信していくのがねらい」（日経）、「研究拠点を新設、活動強化—現代に『親鸞』生かす試み」（読売）、「親鸞の思想を現代に問う—4000万人の悩み集積する首都圏で」（産経）等。センターの願いを的確に表現してくださっている。また、襟を正さざるを得ない意見もあった。「現代人の悩みを救うなどという以前に、今までのような仕方であつた親鸞の言葉、つまり真宗の教えは人々に届いているのか。単なる親鸞教義の研究ではなく、仏教は、人間を支える救いになるのだという信念の確立であり、加えて、そのことを宗門用語ではなく、一般の人々にわかる普通の言葉で伝えていく」（産経）。まさにそのとおりである▼2年目を迎えたセンターは、運動方針3項目①「各分野で活躍される識者との研究交流の拡大」②「『現代』と『親鸞』をキーワードとした研究会の充実」③「『anjali』・『現代と親鸞』・『親鸞仏教センター通信』三誌紙の充実」を掲げ、活動のさらなる強化をはかりたい。なお、前号で紹介の研究誌『現代と親鸞』創刊号ご希望の方は、センターまでご連絡ください。（長谷岡）